

明治後期の広島における洋楽普及

—「丁未音楽会」に見る西洋音楽へのまなざし—

大迫 知 佳 子（日本学術振興会海外特別研究員）

1. 序

日本への洋楽の移入は幕末維新期に始まり、文化・政治的な展開に拠って曲折したのち、明治後期にその定着の土壌が整えられた。⁽¹⁾普及の黎明期ともいえるこの時期において洋楽は都会的な現象であったとされ、⁽²⁾いわゆる地方都市への普及に関しては、東京音楽学校など洋楽移入の中心となっていた諸機関を卒業した者達の果たした役割に目が向けられてきた。⁽³⁾

「丁未音楽会」は、時を同じくした明治後期、明治三九（一九〇六）年に誕生した広島高等師範学校校友会の附属団体である。⁽⁴⁾本会設立の目的は高等師範学校の性質に沿ったものであり、必然的に当時の音楽教育の流れを汲み、洋楽に関連する活動が核に据えられている。その活動とは講演会と演奏会という二つから成り、明治四〇（一九〇七）年の発会式以降、三年間で観客数は延べ一万人近くに達し、地元にも広く流布していた⁽⁵⁾「中国」も関連記事を頻繁に取り上げた。⁽⁶⁾さらにこの音楽会は、他の公的機関との連携というより大規模な活動をも通じて洋楽普及に貢献している。⁽⁷⁾つまり「丁未音楽会」の存在は明治後期の広島で洋楽普及が盛んに行われていたという事実を示唆しており、その規模を勘案すると同会は洋楽普及におけるこの地域独自の傾向を創出し得た組織のひとつであったと考えられる。

本稿の目的は、「丁未音楽会」に関する史実の解明を通して、明治後期の広島という地方都市における洋楽普及の在り方について検証しようとするものである。この目的のため、本稿では次の順で論を進める。まず、一次資料をもとに「丁未音楽会」の目的と活動形態を整理する。次に、音楽会の内容および音楽会への批評のそれぞれに見る洋楽に対する関与者達の姿勢について分析し、その特徴を抽出する。最後に、それらの特徴に基づき明治後期の広島における洋楽普及

及の在り方について考察する。

2. 「丁未音楽会」発足の目的と活動形態

「丁未音楽会」は、明治三十九年十二月に広島高等師範学校校友会の附属団体として組織された。⁽⁸⁾その名称は、音楽会が活動を開始する明治四〇年の干支にちなんだものであり、「全人教育」の観点から音楽教育を重視するという広島高等師範学校にあつて、⁽⁹⁾同校初代音楽教員の吉田信太の尽力により設立に至る。音楽会組織は、会長（一名）、主任（一名）、委員（若干名）、理事（若干名）、そして商議員（若干名）から成り、明治四〇年一月七日に最初の役員を定めている。⁽¹⁰⁾同年一月二〇日（日曜日）午後一時半⁽¹¹⁾より、広島高等師範学校講堂にて発会式兼「丁未音楽会」第一回演奏会が行われる。⁽¹²⁾この演奏会は広島高等師範学校の音楽特別教室披露をも兼ねていた。⁽¹³⁾当日は雨天にも関わらず、来賓、会員併せておよそ七百名が出席するという盛況ぶりであったという。⁽¹⁴⁾

「広島高等師範学校丁未音楽會會則」（以下「會則」）は同音楽会の目的と活動形態を次のように規定している。⁽¹⁵⁾

第一條…本會ハ音楽ノ理論及技術ヲ研鑽シ其教育的價値ヲ發揮シ併セテ音楽趣味を社會ニ普及セムコトヲ努ムルヲ以テ目的トス

第八條…本會ノ目的ヲ達セムタメ左ノ事業ヲ行フ、

- 一、音楽ニ關スル學理ヲ研究スルコト
- 一、毎週約一回技術ノ練習ヲ行フコト
- 一、毎年三回例會ヲ開クコト
- 一、秋期大會ヲ開クコト
- 一、臨時専門家ヲ聘シ演奏又ハ講演ヲ請ヒ若クハ大會ヲ開クコト
- 一、音楽ニ關スル書籍及ビ雜誌ヲ購讀スルコト

※カタカナ・ひらがなの混合は原文ママ…以下同様。

つまり「會則」によると、この会の目的は、音楽に関する理論・技術の研鑽の成果を教育へ応用し、音楽趣味を社会に普及させることであった。役員の本會は教育の立場から音楽を研究するのが本旨で、娯樂の爲にする演奏會でない

から……⁽¹⁶⁾という記述からも、「丁未音楽会」が教員を養成する高等師範学校という学校の性質を第一義としていたことが窺える。

『丁未音楽會講演集』⁽¹⁷⁾は音楽会発足以降の活動記録であり、明治四三年（一九一〇）に第一巻が、翌明治四四（一九一一）年に第二巻が出版されている。同記録「發刊の辭」には、前掲「會則」第八條に関連して「主要なる事業として、毎年數回演奏會及講演會を開催し會員相互の研究練磨を積み、一般の社會に對しても聊か貢獻せんことを期待して居るのである。」⁽¹⁸⁾と記されている。つまり「丁未音楽會」は「會則」第一条に掲げた目的を遂げるために、第八條に従って「學理ヲ研究スル」場としての講演會と「技術ノ練習」の成果を示す場としての演奏會という二つの會を年に數回一般に向けて主催したことになる。

それでは、第一条の定める「音楽」が対象とする所に留意しつつ、講演會と演奏會における洋楽を巡る関与者達の姿勢について具体的に検討してゆこう。

3. 「丁未音楽會」に見る西洋音楽へのまなざし

3. 1. 「丁未音楽會」講演會

3. 1. 1. 講演者

「丁未音楽會」のうち学理（理論）面を扱った講演は、演奏會の前または途中に差し挟まれる形で行われていたが、⁽¹⁹⁾明治四一（一九〇八）年には「演奏會の方は着々成功するに拘らず、理論の方は教室に於て聞く外耳にする事なきを以て、以後此種の講演會を開くこと」⁽²⁰⁾となった。講演の日時、演題、講演者、そして対象に関して『丁未音楽會講演集』で詳らかにされている事柄を表1にまとめた。表1に見られる講演者の大部分は「丁未音楽會」の役員であり、講演対象も一般というよりもむしろ音楽會会員や学校関係者などの限られた層であったことが窺える。

さらに講演内容からは、講演者に関する二つの情報を見て取ることができる。すなわちひとつ目は、幾人かの講演者が西洋の地で直接洋楽を聴いた経験を有することである。例えば、「丁未音楽會」会長の北條時敬は「聴者の音楽」という講演において次のように述べている。

予倫敦に滞在せし時、「ロイヤル、アルベルト、ホール」の合奏會に到り、

青年及び老年と題する曲を聞きて、吾學校の學生々活を懷想し、頻に感懷を催したることあり（略）。⁽²¹⁾

同様に塚原政次⁽²²⁾や内海靜⁽²³⁾も、彼らが西洋で洋楽を耳にしたことに触れた。

二つ目は、講演者が音楽や音楽教育に関する西洋の文献を講演中に好んで引用したことである。彼らは例えば、「シヨールペンハウエル『其音樂の哲學』」⁽²⁴⁾「フホルケルド教授」⁽²⁵⁾の唱歌音楽と国民性の關係に関する研究、「カール、ピュッヒャー」⁽²⁶⁾の音楽説、ドイツの「エフ、ニーツォールド」氏やフランスの「ラヴィンギヤック教授」⁽²⁷⁾の研究等を参照・引用し、洋楽や唱歌教育に関する思想、歴史、研究等を説明するとともにそれを日本の音楽や音楽教育への適用や比較のためにも活用している。「會則」が第八條の最後に定めた通り、「丁未音楽會」には會員閱覽のための西洋雑誌 *Monatschrift für Schulfesang* が備えられていたという事実にも、會員たちが西洋文献を日常的に参照していた状況が窺える。⁽²⁸⁾つまり「丁未音楽會」における洋楽に関する講演の大部分は、西洋から東京を経て広島へ伝えられた間接的な知識ではなく、講演者自らの経験や講演者が一次文献から得た知識に基づいていたということが出来る。

3. 1. 2. 講演内容

続いて講演内容の詳細には、このような背景を持つ講演者達の洋楽に対する三つの特徴的な姿勢を指摘することができる。まずひとつ目は、日本の音楽文化や音楽教育は西洋のそれよりも劣っており、西洋の在り方を目指すべきであるとする姿勢である。例えば塚原は唱歌教育についての講演の中で、次のように述べている。

實に西洋の宗教が音楽を利用して人々の信仰心に刺戟を興ふるが如き清秀にして雄大なる音楽とは到底比較は出来ない、眞に「我が国の音楽と宗教の關係の方が」數百段も劣つて居ることは争はれない事實であります。（中略）然し廣く歐米の進歩したる音楽から見ますと、何うしても我が邦の音楽は彼等に一步を譲れりと云はざるを得ないのであります。どうか我が邦にも廣く世界的に行はるゝ高尚なる音楽を隆盛ならしめたいのでありま

す。(29)

そして彼は、東京以外の都市でも欧米のように公園等で気軽に音楽を聞く機会が提供されることを願う旨を説明し、⁽³⁰⁾「何時かは彼等欧米の音楽と比肩することを得るに至ることでありましょう」⁽³¹⁾と結んでいる。また眞田は同じく唱歌教授に関する講演において、欧米に見られる経験的研究法と科学的研究法の流れを紹介し、日本の唱歌教授への科学的研究の視点の必要性を説いた。⁽³²⁾さらに内海は自身が目にしたスコットランドの唱歌教授法の実状と日本の実状を比較し「我國の音楽教授は未だ進歩したりとは言ふことを得ない」⁽³³⁾と述べている。

二つ目は、日本と西洋間の文化・国民性の相違を理由に、西洋の音楽文化や音楽教育をそのまま日本に適用すべきではないと考える姿勢である。例えば、「丁未音楽会」の創始者である吉田信太は唱歌が国民教育を担うという立場から、次のように述べている。

我國の國民教育に於ける唱歌は、未決の問題である。無意味に西洋の模倣をなし、甚だしき誤解に陥つてゐるものが少くない。(中略)今日の國民教育に於ける唱歌は、英、米、獨、佛、露、等のもの、そのまゝを採用して居る。それが甚だしい誤りである。⁽³⁴⁾

同様の見解は小西の講義にも見られるが、彼はさらに「要は日本に於ても教育者は日本の音楽の精神をも研究し、其固有の國民性を發揮すると共に、外國の進歩せる部分を採用して國民性を發達せしむることが必要であると思ふのである」⁽³⁵⁾として、日本の国民性に合致した音楽文化を發達させるという目的をもつて外國の進歩した部分を取り入れることを提案した。また、先に挙げた眞田の講演においては二つ目の特徴が共存している。眞田は先述の見解を示した後、西洋の歴史・社会背景と音楽趣味の關係に言及し「從て、彼國の曲を、悉く直にとり來り、又其教法をも其まゝに用ふることを許さざるべし」⁽³⁶⁾とした。さらに北條は、洋楽(管弦楽)に「金聲」が混じることを自身の耳が快く感じないと批判しつつ、能楽の囃子の太鼓の音がドイツ人の耳に聞き苦しいこととそれを比較して、太鼓の音を「調和の美」と聴く日本人と「獨立分離の音」と聴く

ドイツ人の耳の違いをその理由に挙げた。⁽³⁷⁾

最後は、日本と西洋の音楽文化や音楽教育に差を認めない姿勢、すなわちそれらに同等の価値を見出したり、音楽を世界に共通する普遍的なものとする姿勢である。例えば春山は、平家琵琶法師を「ツルウヅール(トルバドゥール)」に比すべきものと位置づけた。⁽³⁸⁾黒坂は、国民性や文化的差異を認めつつ「音楽は世界的の言語であると云ふ事を耳にした。穿ち得て妙である。即、音樂の國には國境がない」⁽³⁹⁾とした。また眞田の講演においては同様の主張が再び共存している。⁽⁴⁰⁾さらに、二つを対照した上で邦楽により進歩した点を認めた次のような記述も見られた。

西洋音樂の長處であつて、日本音樂の短處とも云ふべき處のものは、「ハーモニ」でありましょう。又日本音樂に於て、特に秀で居る處のものは「ヴォイス」でありましょう。(中略)又我國の語物、假令ば義太夫、薩摩琵琶、及び謡曲の如きは、西洋の「レシテーション」の一層進歩した物の様に私は考へます。⁽⁴¹⁾

留意すべきは、これらの姿勢が教育分野の講演者と文学(美学)分野の講演者の両方に見られること、そして一人の講演者にこれらの姿勢の共存が認められることである。すなわち「丁未音楽会」の講演においては洋楽に対する多面的な姿勢が混在する形で洋楽の学理面に關する普及が行われていたといえる。

3・2. 「丁未音楽会」演奏会プログラム

次に、会の技術(実践)的な側面を担う演奏会について検討しよう。第一回から十二回までの「丁未音楽会」演奏会プログラムに見られる一次的洋楽作品⁽⁴²⁾と演奏会対象者を表2にまとめた。⁽⁴³⁾

表2の付記欄に記載した対象者に関する情報は、この演奏会が「丁未音楽会」会員や高等師範学校職員及びその家族、そして小中学校等の学校關係者を主な対象としていたことを示している。さらに入場者の年齢について「七歳以下の小児は入場を謝絶する」という制限も設けられていた。⁽⁴⁴⁾また、付記欄の演奏者情報からはやはり広島在住の東京音楽学校卒業生やその繋がりが洋楽の演奏に

大きく貢献していたことが窺える。しかしそれだけではない。第十二回では東京音楽学校の外国人教師が一次的洋楽作品のみによる演奏会を行っており、第二回、第八回においても広島在住の外国人が演奏を披露している。第八回演奏会に際しては、これら広島在住の外国人演奏家を「丁未音楽会」賛助会員に推薦する動きも見られた。⁽⁴⁵⁾つまり講演会が、自身の渡欧経験や欧文献に基づく日本人による講演で構成されていたのに対し、演奏会においては外国人その人による洋楽演奏もなされていたということである。

同じく表2に記した回ごとの全演奏作品数と一次的洋楽作品数の関係に目を向けると、各回の全演奏作品に対する一次的洋楽作品の割合が高いことが分かる。反対に純邦楽作品は、十二回の演奏会の中でわずか一作品しか演奏されていない。⁽⁴⁶⁾演奏形態についても同様であり、第二回以降は純日本伝統音楽の演奏形態も見られなかった。つまり、これら十二回の演奏会で演奏された作品のうち一作品を除くすべての作品が第一〜三次的な洋楽作品であったということだ。具体的な演奏曲目からはレパートリーが豊富であること、そしてドイツ語圏、フランス語圏、それ以外の欧州圏の作曲家による作品や国民歌等が幅広く採用されていることが窺える。

従って「丁未音楽会」演奏会プログラムにおいては、外国人演奏家を迎え、洋楽作品の演奏や演奏技術の獲得を推進しようとする演奏者・企画者の姿勢を見て取ることができる。

3・4. 「丁未音楽会」演奏会への批評

最後に、演奏会を実際に傍聴した来聴者の批評について検討する。明治四〇（一九〇七）年に行われた第四回演奏会に関して『中國』には次のような傍聴記が記載されている。

第一の唱歌（會員）は舟行（ハルトマン作曲）も告別（獨逸國風）もよかつたが。練習が足らぬためかや、不統一の點があつた。それに假へばウーとまつすぐに唱ふべき所をウーと云ふ風に調子を逸す癖があつたやうに聞いた。（中略）第三の獨唱（會員上田晴甫氏）のアー、フウエン、ザイン、アイズ、オブ、アジューア（ラッセン作曲）は奇麗に唱はれて感心した。たゞ

その聲がやゝ口中に含みすぎたやうに思ふのとDに終つた處に一ヶ所癖があつたかを聞いたけれど而しこれは耳が悪いからであらう。⁽⁴⁷⁾

傍聴記を記した人物は、同じ記事において自分を「音楽の知識絶無である」としている。しかし、前記引用からは少なくとも彼にドイツ語音名の知識があり、洋楽の歌唱法等についての見識もあり、洋楽演奏を判断する耳が備わっていたということが窺える。同記事には、演奏会の最後のプログラムであったケルビーニの〈橘の薫〉についての一紳士の評も紹介されており、この評は観客の耳に関する同様の状況を示唆している。ヴァイオリンの練習不足の指摘などがなされた明治四一年の第六回演奏会の傍聴記⁽⁴⁸⁾にも、学生と見られる執筆者の洋楽への判断力が表れている。そしてこれら来聴者の批評には、演奏の改善点を指摘し、洋楽を高い水準で演奏することを目指す姿勢を見ることができるのである。

一方、明治四二（一九〇九）年の臨時演奏会における、東京音楽学校教師「ハンカ、ベツツオールド夫人」の演奏への感想は以下のように記されている。

東京音楽學校教師ハンカ、ベツツオールド夫人は昨年我が講堂に於ける丁未音樂會主催の音樂會に於て十數番の曲を演奏し、非常なる喝采を博し、眞に廣島人士をして西洋音樂の妙味を知らしめ、西洋音樂を知ると知らざるとを問はず、聽衆をして夫人の妙技に恍惚たらしめたるをあり。（中略）吾人は眞に大家の音樂は殆んど何人をも同様に感動せしむるものなることを今更ながら深く感じたり。⁽⁴⁹⁾

新聞記事に掲載された調子とは少し異なり、こちらは興奮をもって演奏会の様子を伝えている。そして、傍聴者は外国人教師の洋楽演奏をほとんど何人をも同様に感動させる音楽と位置付けていることが分かる。

以上のことから、「丁未音楽会」の演奏面に関連する事柄に関しては、総じて洋楽への肯定的な姿勢を窺うことができた。すなわち、演奏会では洋楽作品の演奏が推奨されるとともに、高い水準での洋楽演奏技術の獲得が目指されていた。従って演奏面に関する者たちの姿勢は、講演者のひとつ目の姿勢に近かったと考えることもできよう。

4. 結論

ここにおいて「丁未音楽会」での洋楽普及に特徴的な事柄を次のように整理することができる。まずは普及者に関して、講演会では海外滞在経験者あるいは西洋の文献から直接知識を得る者が講演を担い、演奏会では外国人演奏家が演奏を担うことがあった。前者と後者には西洋音楽文化を自国文化とするか否かという決定的な相違はあるものの、直接本場の洋楽を見聞あるいは参照した者達によって洋楽普及が行われていたという点は共通している。またそれを聴き一般に伝える被普及者兼普及者には洋楽を判断するための知識と耳を持つ人物が少なからず含まれていた。

さらに内容に関して、講演会では洋楽への三つの姿勢の混在が指摘できた。すなわち、西洋音楽文化やその教育をわが国が目指すところとする姿勢、そのまま日本に適用すべきではないとする姿勢、そして邦楽と同等とみるかあるいは邦楽に進歩した点を見る姿勢である。一方、演奏会とその批評には洋楽作品の演奏機会を提供することに対する肯定的な姿勢が見られ、西洋に比肩するような高い水準での洋楽の演奏が目指されていた。しかし既述の通り演奏会にはしばしば講演が差し挟まれており、表1からは演奏会の告知や報告と同様、講演の内容が『中國』に掲載されていることも窺える。従って、これらの演奏は客観的なまなざしをもった講演とともに披露されたのであり、プログラムに洋楽作品が占める割合が高いことに比例する如く、洋楽への肯定的な立場のみから普及されたわけではなかったという点を考慮すべきであろう。

つまり明治後期の広島においては、「丁未音楽会」による「學理ヲ研究スル」ための講演会と「技術ノ練習」の成果を示す場としての演奏会という洋楽の理論実践両面に関する二つの普及形態が合わさることにより、洋楽文化とともに日本人の国民性に合致した音楽文化を尊び創造していくという視点が併存する形で、洋楽の普及が推進されていたのである。そこには遠く東京の地で定着しつつあった「洋楽」というものへの憧れや物珍しさといった類のまなざしは見受けられず、地方都市においても直接的かつ客観的に洋楽の普及が行われていたことが明らかである。そして、主として学校関係者であった「丁未音楽会」の対象者達がこの会を基に洋楽の再普及を行うことにより、広島は明治後期の

日本における洋楽普及の一般化された傾向の形成への一助をも果たしていたのではないだろうか。⁽⁵⁰⁾

二〇一四年二月二十八日 受領



広島高等師範学校丁未音楽会（大正9年）（三浦精子氏所蔵）(51)

回	日時(場所)	講演題目	講演者(講演時の会内身分)	付記
1	1908 / M41年3月5日(講堂)	「シコーペーベンノヴェル」の音楽説	野田義夫(主任)	・来聴者は会員80余名、藤村教授、吉田助教授、附属小学校の藤村、野村の2教師
2	1908 / M41年6月20日(職員食堂)	音楽の起源	野田義夫(主任)	・来聴者は会員40余名
3	1908 / M41年11月27日(講堂)	音楽の真髓	西晋一郎	・来聴者は30余名 ・『丁未音楽會講演集第壹輯』内の記事「音楽」が講演内容にあたる とみられる
4	1909 / M42年6月14日(音楽教室)	情の言語	黒坂慎次(特別会員)	・『丁未音楽會講演集第壹輯』に掲載
5	1910 / M43年6月21日	音楽上の雑感	内海静(特別会員)	・『丁未音楽會講演集第貳輯』内の記事「音楽雑話」が講演内容にあたる とみられる
		美の定義	小西重直(主事)	・『丁未音楽會講演集第貳輯』内の記事「美の性質の一部」に就て「が講演内 容にあたる」とみられる
6	1911 / M44年1月13日	音楽教育に就いて	三澤糾(商議員)	・『丁未音楽會講演集第貳輯』内の記事「音楽教育論」が講演内容にあたる とみられる
演1*	1907 / M40年1月20日	不明	小西重直(商議員)	・第1回演奏会第2部冒頭における講演
演3	1907 / M40年6月21日	音楽と社会教育	塚原政次 ※1908 / M41年11月から商議員 ※1910 / M43年から主事	・第3回演奏会第2部冒頭における講演 ・『丁未音楽會講演集第壹輯』および6月24日・26日付の『中国』に内容 掲載
演5	1908 / M41年3月30日	不明	塚原政次	・演奏会卒業記念大会第2部における講演 ・この大会の第1部は講演会だった
演		音楽の教育的價値に就て	小西重直(商議員または主事)	・第3回および6回演奏会における講話と見られる
演6	1908 / M41年10月11日	音楽は果して人心を淫靡ならしむるものか	青/赤木萬次郎	・『丁未音楽會講演集第壹輯』に掲載
演		演奏前二十分	春山作楯(商議員)	・第7回演奏会における講話と見られる
演9	1909 / M42年11月27日・28日	日本古来ノ音楽ニ近世ノ音楽ノ比較	北條時敬(会長)	・第9回演奏会第2部冒頭における講話
演10	1910 / M43年2月27日	咽喉の硬直に就て	眞田幸憲(商議員)	・『丁未音楽會講演集第貳輯』内の記事「咽喉硬直」が講演内容にあたる とみられる
不明		聴者の音楽	北條時敬	・『丁未音楽會講演集第壹輯』に掲載
不明		唱歌教授の研究に就て	眞田幸憲	・『丁未音楽會講演集第壹輯』に掲載
不明		国民教育に於ける唱歌	吉田信太	・『丁未音楽會講演集第貳輯』に掲載
不明		児童と音楽	塚原政次	・『丁未音楽會講演集第貳輯』に掲載
不明		藤原時代の樂器特に管絃	栗田茂治	・『丁未音楽會講演集第貳輯』に掲載

表 1 丁未音楽会における講演会一覧 (広島高等師範学校丁未音楽會『広島高等師範学校丁未音楽會講演集』1910: 70-87, 1911: 74-75 及び各講演詳細を参考に大迫/作成)
*表 2 に示した演奏会を指す。以下同じ。

回	日時(場所)	曲目	作曲者【大迫付記】	演奏形態	全作品数	一次的洋楽作品数	付記
1	1907/M40年 1月20日 (講堂)	新年の祝 破邪曲 コラル マーチ 植田慶鐘 ワル(ワタルヲ) ガクオクト トロタライ ウイツデゾグマーチ カミソグ、スロー、ザライ トリツカリツツ ラ、マルセイエーズ いざうたな ソナチ子	クツケン クツケン チェルニー チェルニー ソルヘル ロツクニー ソルヘル シューマン シューマン メンデルスゾーン メンデルスゾーン 記載なし【スコットランド民謡】 記載なし 佛國々歌 ソルヘル クーラウ	唱歌 唱歌 オルガン独奏 オルガン独奏 唱歌 ピアノオルン合奏 ピアノオルン合奏 オルガン連奏 オルガン連奏 記載なし【スコットランド民謡】 ピアノ独奏 唱歌 合唱 ピアノ独奏	25	14	<ul style="list-style-type: none"> ・来聴者は第五師団長海軍兵学校教官始め七百余名 ・純邦楽作品「松風」(第)の演奏あり ・1月9日付の『中国』に告知記事 ・1月22日付の『中国』に報告記事
2	1907/M40年 5月7日 (講堂)	ライオン、グッヘ、ユーヘ オウウツ、ザツ、ライ、ライ ゾボン、ウエー、リス、ラスト、アインデア ゼ、キング、オヴ、セ、ト、イズ ヨールデン、ソニス 日本三景 セントポール ムーンライト、ソナタ	メンデルスゾーン クラーメル クラーメル グノー 記載なし【バスン】 クルピニ メンデルスゾーン ベートホーヴェン	ピアノ連弾 二部合唱 ピアノ独奏 ピアノ独奏 ピアノ独奏 三部合唱 三部合唱 ピアノ独奏	9	8	<ul style="list-style-type: none"> ・来聴者は会員、職員家族、学生等八百余名 ・ソヤンノ嬢(ピアノ)、ラニヤス嬢(ピアノ・歌)、サウター嬢(ピアノ)による演奏あり ・5月9日付の『中国』に報告記事
3	1907/M40年 6月21日 (講堂)	コール ガクオクト ゾインナーマーチ 旅の夜 姉妹 セシナーデ デ、ルスチーグ、ウイベル、 フオンウキンゾール イタリアン、ローマニス ガクオクト *デハコフ●ボバノシガツ	ブルック ホフマン ヨルボン ルーベンスタイン クラーメル グノー 記載なし【オットー・ニコライ】 ボエーム レフエールト ボバルデン	オルガン独奏 ピアノオルン合奏 ピアノ独奏 二部合唱 二部合唱 二部合唱 獨唱 ピアノ独奏 ピアノ独奏 ピアノ連弾	28(29)	9(10)	<ul style="list-style-type: none"> ・市内及び郡部小学校教員六百余名を招く ・来賓は本県事務官、郡長、郡視学、各校長等九十余名 ・6月18日付の『中国』に告知記事 ・(第3回演奏会は6月22日午後7時からと告知されている) ・6月22日付の『中国』に報告記事 ・(「安佐郡の如きは百数十名合同して来會する由..」) ・6月24日付の『中国』に報告記事 ・6月24日、6月26日付の『中国』に講演要旨 ・6月20日に講堂で「練習會」を催した

表2-1 丁未音楽会プログラムに見られる一次的洋楽作品(廣島高等師範學校丁未音楽會『広島高等師範學校丁未音楽會講演集』1910:70-87,1911:74-75、各新聞記事を参考に大迫作成：付記以外の表記は文献に従う)

回	日時(場所)	曲目	作曲者【大迫付記】	演奏形態	全作品数	一次的洋楽作品数	付記
4	1907/M40年 11月30日及び 12月1日 (講堂)	舟行	ハルトマン	唱歌	13	11	<ul style="list-style-type: none"> ・来聴者は音楽会員及び職員家族広島市内の紳士淑女八百余名 ・11月17日付の『中國』に告知記事 ・12月2日付の『中國』に報告記事 ・前日に「予習会」を催した
		ゼ、リエーベザント	シュューバルト	ヴァイオリン合奏			
		ワーチ	ホフマン	ヴァイオリン合奏			
		デー、ワウエン、ザイン、アイズ、オズ、	ラッセル	獨唱			
		アジューア					
		スヴェートホーム	ヒューカイト	オルガン獨奏			
		紅葉狩	アフト	合唱			
		子アボリタン	ローレン	ヴァイオリン獨奏			
		ジョセリンの子守歌	ヨダール	獨唱			
		ホットデーリー	ニコライ	ピアノ連弾			
ロンドー	アダム	ピアノ連弾					
5	1908/M41年 3月30日 (講堂)	*桶の藪	クルビニ	合唱	10	9	*山中高等女学校との合同演奏
		戀しき母	ベルスキヤ	唱歌			
		花のあけくれ	ハヴラト	唱歌			
		オー、ザイト、ワー、ウエーア、モーイング	グーナー	獨唱			
		鶯の歌	ハルラー	合唱			
		船出	ハルラー	合唱			
		ホーム、スウイト、ホーム	記載なし【イングラント民謡】	オルガン獨奏			
		歸雁	メンデルスゾーン	二部合唱			
		比御山	モツァルト	合唱			
		薩摩鶴	シュューマン	合唱			
6	1908/M41年 10月10日 10月11日 (講堂)	親しき友	シムベル	合唱	19	19	<ul style="list-style-type: none"> ・来聴者はあわせて千五百余名 ・10日は学生、11日は中等学校教員官吏実業家を主とし、小学校教員も招請される。 ・10月13日付の『中國新聞』に報告記事
		慈善	グローザア	合唱			
		ローレンス	リンコルン	ヴァイオリン獨奏			
		秋の夜	ライハルト	獨唱			
		*ソナタ	ハイトツ	ピアノ獨奏			
		櫻井	モツァルト	二部合唱			
		バシカロール	ヒンシャア	ヴァイオリン獨奏			
		マツオルカ	デムス	ヴァイオリン獨奏			
		デア、リッデン、バナム	シュューバルト	獨唱			
		薩摩鶴	シュューマン	合唱			
大塔堂	クルスバハ	合唱					
二見ガ浦	ロリス	合唱					
旅愁	米國民歌	獨唱					
ソナチ子	グロスハインム	ヴァイオリン獨奏					
秋風	レンツ	二部合唱					
**アゾプロアチュー	シュューバルト	ピアノ獨弾					
ロツクイト、ザ、クレードル、オズ、ザ、	アール	獨唱					
デーナイト、モード、オズ、アゼンス							
ベルスース(ワロム ジョズリン)	記載なし【ヨダールまたはグーナー】	ヴァイオリン獨奏					
桶の藪	クルビニ	合唱					

表2-2 丁未音楽会プログラムに見られる一次的洋楽作品(広島高等師範学校丁未音楽會『広島高等師範学校丁未音楽會講演集』1910:70-87,1911:74-75、各新聞記事を参考に大迫作成；付記以外の表記は文献に従う)

回	日時(場所)	曲目	作曲者【大迫付記】	演奏形態	全作品数	一次的洋楽作品数	付記
7	1909/M42年 2月27日 2月28日 (講堂)	全曲作曲者不記載のため判別不可			44		<ul style="list-style-type: none"> ・来聴者は27日附属小学校児童四百名、中学校生徒三百名、校友会百余名。28日広島本市内中等小学校の教員約四百名、会員百五十余名、職員及び職員家族百五十名 ・1月26日、2月23日付の『中国新聞』に告知記事 ・3月2日付の『中国新聞』に報告記事 ・附属小・中学校との合同演奏会
8	1909/M42年 6月19日	ミッドサンデーナイトドリーム ラゼレナータ アソダンテ、ロンド キヤリツシヨロー クリーティイック ベルカサス サベンデーナイト ピテラルツ フロム フアウスト ローレンツツ ワ、ピエーターズソング ノクターン	マデラルスゾーン ゾラガ マデラルスゾーン マデラルスゾーン シヨーンバツ クラーク グーノー ラース ハリー シヨーンバツ	ピアノ連奏 獨唱 ピアノ獨奏 合唱 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノノオルガン合奏 獨唱 ピアノ獨奏	12	10	<ul style="list-style-type: none"> ・北條校長の「萬國道德會議」からの帰朝歓迎のために開催 ・来聴者は職員及び家族、講習員、外国人、音楽会会員、校友会会員六百余名 ・ミスラニヤス(ピアノノ歌)、ミス サウター(ピアノノ歌)による演奏あり ・5月21日付の『中国新聞』に上記2名を賛助員に推薦する旨の報告あり
9	1909/M42年 11月27日 11月28日	舟行 軍の舟出 秋夕 ロオレライ 萩の野原 ララルレーユ 虫の音 我國民士 戦のあと 亡友を想ふ 歸雁 虹 日光月光 春の光 祭 ゆふへの夢	ハルトマン シヨーン 獨逸國民歌 シルヘル アフト 佛國々歌 ノールデー國民歌 クツケン モントコース アフト 獨逸國民歌 獨逸國民歌 ストーベン ゾーラエツ マデラルスゾーン シヨーンバツ	合唱 合唱 獨唱 獨唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 合唱 獨唱	56	16	<ul style="list-style-type: none"> ・附属小・中学校との合同演奏会 ・来聴者は28日に一千人に達する ・知事、中等学校長、小学校教員諸氏各中学校生徒等入場あり ・主として初等教育に従事する人に聞かせることを目的とする

表2-3 丁未音楽会プログラムに見られる一次洋楽作品 (広島高等師範学校丁未音楽會『広島高等師範学校丁未音楽會講演集』1910: 70-87, 1911: 74-75、各新聞記事を参考に大迫作成；付記以外の表記は文献に従う)

回	日時(場所)	曲目	作曲者 [大道付記]	演奏形態	全作品数	一次的洋楽作品数	付記
10	1910/M43年 2月27日 (講堂)	カゲアテナ 故郷の療家 コーラル チヨエチューコーラル 千町田 戴冠式マーチ 此御山 ランナーズ ジオスランの子守歌 ソナタ 昔公 アソダンテ 我が君我が國 二見ガ浦	クロエツ ヘース ヘンデル ヴェーベル マシゲルズメーン マシゲルズメーン モツゲルト スト●ーボツク ゲーナー ハイデン マシゲルズメーン ゲーエーデル シユナーバル ローレル	ヴァイオリン合奏 獨唱 オルガン獨奏 オルガン獨奏 合唱 ピアノ連弾 四部合唱 ヴァイオリン獨奏 獨唱 女聲三部合唱 ヴァイオリン二部合奏 合唱	15	14	<ul style="list-style-type: none"> ・在広東京音楽学校卒業者の組織した研究会による参加卒業生は以下の通り ・吉田信太(広島高等師範学校) ・藤村子孫子(藤村教授令夫人)(広島高等師範学校) ・塚原はま子(塚原教授令夫人)(広島高等師範学校) ・渡邊彌藏(県師範学校) ・關口保雄太郎(県師範学校) ・床尾せい子(県立高等女学校) ・中尾氏(山中女学校) ・来聴者は職員およびその家族、生徒六百余名
11	1910/M43年 3月22日 送別(講堂)	歸雁 賢女の胸中 ソルゼイ ミヌエツク ロントー 別情(注:青の下の月は明)	マシゲルズメーン ハクトルニ レムラン モツゲルト ハルキミルナー カントル エダール シユエーレン	女聲二部合唱 女聲二部合唱 オルガン獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 獨唱 ヴァイオリン獨奏 四部合唱	10	8	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽会商議員の杉森教授と藤村教授転任に際する送別記念演奏会
12	1910/M43年 4月27日 臨時(講堂)	アソダンテ エチユート ボロキーズ レールダラルセスト ワルム ロソナー、ユム、アソフヘツク エチユート エス、アソソクト、デル、タク ソルエーガス、ソソダ アソニー、ローリー ボレロ エチユート リーベスリート 第十二、アソソデー	ショツクベン ショツクベン ショツクベン シユエーレン シユエーレン シユエーレン ヘンゼルト ルーベシヌスタイン グラーダ スコットランド古歌 チリオー リスト リスト	ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏 ピアノ獨奏	14	14	<ul style="list-style-type: none"> ・東京音楽学校教師・ハンカ、ベツツオルト夫人、同校教授神戸駒子女士が音楽教育視察のために来広、これを機として広島県と協議の上、臨時音楽会開催が決定 ・来聴者は七百余名 ・全アソソクトをベツツオルト夫人が演奏(神戸女史長期旅行の疲労のため)

表2-4 丁未音楽会プログラムに見られる一次的洋楽作品 (廣島高等師範学校丁未音楽会『広島高等師範学校丁未音楽会講演集』1910:70-87,1911:74-75、各新聞記事を参考に大道作成:付記以外の表記は文献に従う)

* 『中國』や『中国新聞』の記事に関する詳細は、本稿内の註および、本稿末の補足文献情報を参照のこと。

- (1) 竹中亨 二〇〇八 「明治のワグナー・ブーム」 『大阪大学大学院文学研究科紀要』四八・三三〜四〇頁。
- (2) 前掲・三八頁。
- (3) 谷口昭弘・森田信一 二〇一〇 「明治期の富山における西洋音楽の受容…文献調査による唱歌教育を中心とした歴史の再構築」 『富山大学人間発達科学部紀要』五(一)・一〇一〜一一頁、坂本麻実子 二〇〇〇(一)・二二 「明治時代の師範学校への音楽教員の配置・東京音楽学校卒業生の勤務校の調査から」 『富山大学教育学部紀要』五四・四九〜六一頁、大迫知佳子 二〇一三 「広島の洋楽普及における広島高等師範学校の役割」 吉田信太に焦点を当てて 『広島の音楽史』 編纂に向けて (第1回中間報告集) 戦前の広島における洋楽の普及 『広島の音楽史』 編纂プロジェクト編・一六〜二二頁等。
- (4) 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会(編) 一九八二 『追懐 広島高等師範学校創立八十周年記念』 広島・広島高等師範学校創立八十周年記念事業会・三三頁。
- (5) 広島日刊 『中国』の発行部数は、明治四一年に『芸備日日新聞』の発行部数に迫る(中国新聞社史編纂委員会(編) 一九七二 『中国新聞八十年史』 広島・中国新聞社・七一頁)。新聞ごとの発行部数が記載されている内務省の記録のうち、最も明治後期に近い明治三三(一九〇〇)年に発行された記録によると当時の『藝備日日新聞』の年間発行部数は一、二三四、二九九部、『中国』は四、五六二、三〇六部であった(内務大臣官房文書課 一九〇〇 『大日本帝国内務省第十四回統計報告』東京・忠愛社・三六八頁)。
- (6) 本稿引用記事および補足文献情報を参照のこと。
- (7) 大迫 二〇一三・一六〜二二頁。
- (8) 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会(編) 一九八二・三三頁。
- (9) 菅真城 二〇〇二 『五十年史編集室だより』(十八) 広島高等師範学校創立百周年『広大フォーラム』三四期三号 No.三七一。
- (10) 会長：北條時敏、主任：野田義夫、委員：吉田信太、藤村スエ、野村ハル、理事：戸塚巖、小和田惟徳、加藤善之助、鈴木博也、八丁春太郎、小林良輔、上田耕甫、田中丁蔵、栗田茂治、商議員：杉森此馬、藤村作、小西重直(広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九一〇 『丁未音楽會講演集第壹輯』大阪：開成館・六九頁、中国新聞社 一九〇七a 『広島高師の丁未音楽會』『中国』(一月九日)。会員の会費に関しては、特別会員の会費は毎月十銭、通常会員の会費は金三銭であった(中国新聞社 一九〇七b 『丁未音楽會々則要綱』『中国』(一月十九日))。
- (11) 『中国』一九〇七c 『丁未音楽會發會式』(二月三日)によると、実際の開会時間は午後一時四〇分であった。

- (12) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・七〇頁、『中国』一九〇七c、『中国』一九〇七d 「高等師範音楽演奏會」(二月九日)。
- (13) 『中国』一九〇七d。
- (14) 『中国』一九〇七c。
- (15) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・六九〜七〇頁、中国新聞社一九〇七b。
- (16) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・十九頁。
- (17) 広島市公文書館から国立国会図書館への承認を待って二〇一三年五月から本資料全巻(複製)の閲覧が広島市公文書館においても可能となった。
- (18) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・頁番号なし・發刊の辭。
- (19) (略) 其中小學校長以上の来賓は開會前に音楽教室階上に導かれ茶菓の饗應あり此こ「漢字判別不可」にて高等師範學校教授文學士小西重直氏より歐州に於ける音楽界の現状及其影響につき一場の談話あり定刻となるや(中略)第二部演奏の開始に先立て同校教授文學士塚原政次氏は音楽と社會的教育の關係に就きて有益なる演説を為し(『中国』一九〇七e 『丁未音楽會演奏會』(六月二四日))。
- (20) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・七六頁。
- (21) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・四頁。
- (22) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・十〜十二頁。
- (23) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一 『丁未音楽會講演集第貳輯』大阪：開成館・十三頁。
- (24) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・六十頁。
- (25) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・十一頁。
- (26) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・一六〜一七頁。
- (27) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・二四〜三〇頁。
- (28) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・七六頁。
- (29) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・十〜十三頁。
- (30) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・十四頁。
- (31) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・十六頁。
- (32) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・三七〜四二頁。
- (33) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・十四頁。
- (34) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二一・三三〜三三頁。
- (35) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・五八頁。
- (36) 広島高等師範学校丁未音楽會(編) 一九二〇・四二頁。

- (37) 広島高等師範学校丁未音楽會(編)一九一〇…一〇二頁。
 (38) 広島高等師範学校丁未音楽會(編)一九一〇…二二頁。
 (39) 広島高等師範学校丁未音楽會(編)一九一〇…四四頁。
 (40) 広島高等師範学校丁未音楽會(編)一九一〇…三三頁。
 (41) 広島高等師範学校丁未音楽會(編)一九一〇…十八、十九頁。
 (42) 「ヒロシマと音楽」委員会『広島の音楽史』編纂プロジェクトにおける検討の結果、「洋楽」の定義を「日本伝統音楽に含まれない要素を持った作品すべて」と定めた。その上で「洋楽」の中に以下の三つの下位分類を置く。1. 西洋の作曲家による作品および、西洋の作曲家による作品を和楽器用に編曲したものを「一次的洋楽」とする。2. 「ドレミ」で書かれた1以外の作品と、洋楽演奏形態を用いて演奏される日本伝統音楽を「二次的洋楽」とする。3. 日本伝統音楽を和楽器と洋楽器で演奏するものを「三次的洋楽」とする。なおこれは現時点での暫定的な下位分類であり、作曲様式と演奏形態の関係等に関して分類法に課題を残しているため、今後再検討・改定を行う。
- (43) 渡邊彌蔵 一九五四 『廣島の音楽五十年 未定稿』広島市公文書館蔵(私家版)…三頁にも演奏会に関する表と同様の情報が記されている。本資料には同音楽会設立から昭和十四年までの活動記録が見られる。
- (44) 『中國新聞』一九〇九 a 「丁未音楽會出席者心得」〈二月二五日〉。
 (45) 『中國新聞』一九〇九 b 「丁未音楽會賛助員推薦」〈五月二一日〉。
 (46) 明治四五(一九一二年)年には、丁未音楽会和洋音楽会が開催され、勸進帳等が演奏された(渡邊 一九五四…四頁)。
- (47) 『中國』一九〇七 f 「秋季音楽演奏會に臨みて」〈十二月二日〉。
 (48) 『中國新聞』一九〇八 a 「丁未音楽會秋季演奏會」〈十月一三日〉。文末に「傍聴生」と署名がある。
- (49) 広島高等師範丁未音楽會(編)一九一〇…七〇頁。文末に「好樂生」と署名がある。
 (50) 千葉優子 二〇〇七 『ドレミを選んだ日本人』東京…音楽之友社では、明治期の日本における洋楽を巡る姿勢の共存について論じられている。これらの姿勢と本稿で考察した姿勢との関係についての論は次稿に譲る。
- (51) 本写真は、広島市公文書館に所蔵されている丁未音楽会の写真のうち、本論文の対象時期に最も近い大正九年のものである。明治期の写真として確認できるものが見つかっていないこと、丁未音楽会管弦楽団が組織されたのが大正四年であること(渡邊 一九五四…七頁)から、関連資料として掲載する。

補足文献情報…明治期の『中國』及び『中國新聞』における「丁未音楽會」関連記事

・明治四〇(一九〇七)年五月九日「丁未音楽會大會景況」

- ・明治四〇(一九〇七)年六月十八日「丁未音楽會演奏會」
- ・明治四〇(一九〇七)年六月二二日「丁未音楽會演奏會」
- ・明治四〇(一九〇七)年六月二四日「音楽と社會教育(上)」
- ・明治四〇(一九〇七)年六月二六日「音楽と社會教育(下)」
- ・明治四〇(一九〇七)年十一月十七日「獨語漢文通俗講演會」
- ・明治四〇(一九〇七)年十一月十七日「丁未音楽會演奏會」
- ・明治四二(一九〇九)年一月二六日「廣島高師校記事」
- ・明治四二(一九〇九)年二月三日「丁未音楽會演奏會」
- ・明治四二(一九〇九)年三月二日「丁未音楽會(高等師範学校に於て)」

新聞資料の収集にご協力下さった『広島の音楽史』出版プロジェクトのメンバーに心よりお礼を申し上げます。